

図書館友の会 ニュース

発行 岸和田市図書館友の会 《発行責任者 松谷 敬一》

2024年
4月号
No. 30

図書館友の会岸和田再発見教室 公開講演会

倭国と和泉の古墳時代

講師：岸本直文 氏 大阪公立大学院文学研究科教授

古墳時代は前方後円墳の時代です。倭国王位が確立し倭王権ができ、倭国の枠組みが生まれました。この体制は、巨大な前方後円墳である倭国王墓を築造するだけでなく、倭国に連なる地域有力者も同じ前方後円墳を共有させています。このシステムについて解説すると共に、和泉地域の古墳と古墳群を具体的に取り上げ、和泉の古墳時代の動向について考えてみます。



日時 6月22日(土) 13:30~16:00, (開場 13:00) 参加費：無料

場所 岸和田市立八木市民センター(池尻町), 講座室1 (2階)

定員 60名(先着順) (駐車スペースが少ないため、自動車の来場をご遠慮ください。)
【主催】 岸和田市図書館友の会・八木地区市民協議会

◇ 「図書館友の会」の総会を開催 ※「記念講演」は午後2時~4時

日時 6月12日(水)

午後1時~1時30分

場所 図書館本館(岸城町)

3階 自習室



第100回東京箱根間往復大学駅伝競走

記念講演 コラーゲンペプチドの膝関節への影響

—「第100回箱根駅伝」での城西大学駅伝部好成績の背景—

講師：杉原 富人氏 (図書館友の会副会長, 学術博士)

なぜ、今年の「第100回箱根駅伝」で城西大学駅伝部は好成績を挙げることができたのか？この背景を「コラーゲンペプチドの膝関節への影響」の視点から話題提供します。城西大学駅伝部員を被験者とした試験も含めて、コラーゲンペプチド経口摂取による膝関節への影響に関する3種のヒト試験を紹介。コラーゲンペプチドおよびその有効成分による作用メカニズムに焦点を合わせて、細胞レベルおよび動物実験レベルから、その理由を解説します。

※ 記念講演はどなたでも参加できます。ぜひご参加ください。定員40名(当日先着順)

久米田古墳群から摩湯山古墳へ

1月27日、岸和田市郷土文化課の山岡邦章さんの案内で、古墳めぐりをしました。参加者の感想を紹介します。

【注】摩湯山古墳は国の指定史跡です。許可なく立ち入ることはできません。



ちょっとハードな楽しいウォーキングツアー

安井 武昌

今回のツアーは久米田古墳群と普段は入れない摩湯山古墳に入れるのが目玉。ただし滑ったり転んだりする危険性があるので五班に分かれて少人数ずつで行動する。

まずは、久米田古墳群、今回の案内ガイド役の山岡邦章氏から細かくそして丁寧な説明を頂く。「古墳時代のこのような石が表面に出てきて転がってますよ」の言葉で、全員が一斉に地面を見て探し出す。「先生、これは、どう」とまるで小学生に戻ったような無邪気なシニアの集団。

久米田池の端で昼ごはん。皆さん日頃の行いが良いとみえてぼかぼか陽気。昼からはお目当ての摩湯山古墳へ、一列なって古墳の中へ入ると、雑木林と言うよりはジャングル状態。落葉が深く積っていて木は枯れて掴むとポキッと折れる。慎重になればなるほど40mもの細長い列になる。中に入ると東西南北が分からなくなっていて一人なら迷子になりそう。必死に前の人の背中を追いかける。川口浩の探検隊みたいほんと童心に戻って、15mの高さを登ったり降りたりしながら古墳の4分の3周を探検。古墳をお勉強しながらの、ちょっとハードな楽しいウォーキングツアーでおました。

古墳探検できている! なんてロマンチックな!

西村 智子

『摩湯山古墳に入れる』という企画に飛びついた。友の会会員なので優先枠があると岸城短歌教室の尾崎さんから教えてもらい、すぐ申し込みを依頼。

久米田古墳群は地元で、大いに関心興味もある。少しの知識は持ち合わせていた。が、山岡先生の詳細なお話をお聞きできた。中学校内にある女郎塚や古墳であろうと推察されるどころもたくさんあることを実際に歩いて知れた。自分の地域で遙か昔から続く人々の営みが見えて、感慨深かった。

いよいよ摩湯山古墳へ入る。冬枯れしているとは言え、草木がびっしり茂る中を円墳部、方墳部と説明を受けながら慎重に歩く。静かで、木々のすきまからはお堀の水のきらめきの向こうに車の行きかう様子がちらほら見える。古墳探検できている! なんてロマンチックな!

すっかり親しくなったみなさんとお別れして心地よい岐路に着いたことでした。



考古学って、地道で時間のかかるものだなあ

青野 潤子

前日までの寒波も緩み、まずまずのお天気で古墳巡りは始まった。最初に貝吹山古墳。全長130mの前方後円墳。石棺、銅鏡、鉄かぶと等副葬品もあったらしいが、中世に盗掘され、また戦国時代には、三好実休がここに砦を築いたという。

公園として整備されている中、無名塚古墳、風吹山古墳を歩く。風吹山古墳は帆立貝形。青銅鏡、鉄刀、鉄剣、ヒスイ勾玉、碧玉、かなり多くのナトロンガラス（地中海周辺で産出）玉が見つかり、その被葬者の地位の高さがうかがえる。

山岡先生も発掘に参加されていて当時の苦労話も語られた。海も見渡せる丘にあり風もよく通る。女郎塚古墳は久米田中学校内にあった。久米田古墳群と呼ばれているが、もとは10数基からなっていたと推測されている。4世紀後半から5世紀初。

久米田池畔でおにぎりを食べ、いよいよ魔湯山古墳へ歩くこと3km余り。森みたいのが見えてきた、と、鳥の楽園かと思えるほどの様々な鳥の鳴き声が聞こえてくる。堀を渡って、フワフワサクサクと落ち葉と枯れ枝の上を、時に木に掛りながら一歩一歩慎重に登ったり下りたり一時間余り歩く。葺石もあるので踏まないようにと。



時々山岡先生が前方後円墳のぬいぐるみで現在地を指してくれなければ、全長200mの古墳、どこにいるのかさっぱり見当

もつかない。このくびれの部分に造出し（祭祀の場？）があるのではといわれても、想像もできない。竪穴式石室の墳墓で4世紀後半のものと推定されている。今回、全体の4分の1くらいを回ったらしい。この古墳まだ本格的な調査はされてないとのこと。考古学とは、ほんとに地道で時間のかかるものだなあ。貴重な体験ありがとうございました。

地名の秘密

②⑧ 帯解（おびとけ）

子宝成就・安産祈願のお寺の名前から

私が奈良に勤務していた頃、遠方の銀行から信用照会があり、「南都銀行のこの支店の名前は何と読むのですか」と質問を受けた。帯解（おびとけ）と読むと云ったら、「えらい艶っぽい地名ですなあ」と云われた記憶がある。

奈良市に「帯解（おびとけ）」という地名がある。帯解はオビトキでなく、オビトケと読む。帯解とは、また、たいへん変わった名前である。そうした地名はほかにない。このめずらしい地名はいったいどこから来たのだろうか。

妊婦は腹帯をする。無事に出産し、腹帯を解く。腹帯を解くという意味らしい。艶っぽい地名ではないのだ。

JR 桜井線の駅名にもなっている。帯解駅の近くに、帯解寺（おびとけでら）というお寺がある。帯解という地名は、この寺の名に由来する。平安時代のはじめ、文徳天皇の皇后が懐胎したとき、この寺の地蔵尊にお祈りし無事に皇太子（後の清和天皇）を出産した。天皇はこれを喜び、地蔵尊を祀る伽藍を建立し、寺の名を帯解寺にしたという。

帯解寺は求子安産の寺としてよく知られている。寺では子どもが授かるお守りや腹帯を授けている。今の上皇后美智子皇太后、雅子皇后を始め、三笠宮、高円宮、秋篠宮などの皇族が当寺において安産祈願を行っている。（文責 文章教室 浦田榮二）

【参考文献】 日本全国・地名の秘密 北嶋廣敏著 宝島社

「何を…」ではなく、「どう表現するか」が大切

3月3日、図書館において短歌教室の公開講座を開催。倉橋健一氏の著書『歌について・啄木と茂吉をめぐるノート』をもとに金川宏氏（短歌教室講師）がインタビューする形式で進められました。参加者は32名。「文学、歌、詩について、とても刺激を受けた。」「とても内容が濃くておもしろかった。」などの感想が寄せられました。

石川啄木・斎藤茂吉は共に東北地方に生まれ天才と讃えられたが、その境遇は恵まれたものではなかった。啄木は一家離散、後に長男として家族を背負い各地を転々とする。収入も安定せず友人に借金を重ねる。一方、茂吉は望まれて医家の養子候補となり、常に遠慮気遣いの書生として勉学に励むも殺風景な暮らしであった。婿養子・医者となった後も家庭的に幸せではなく孤独感を持つ。

啄木は「明星」で認められ一躍有名になる。作歌姿勢は斬新で従来の形式にとらわれず、字余り可・3行書き・ローマ字表記などで自由に生活を歌い上げ共感を得た。しかし、本望は小説家になることであり、「歌など玩具に過ぎない」ものだった。

茂吉は正岡子規の「竹乃里歌」に感銘し作歌を志す。伊藤佐千夫の門下となり「アララギ」の編集に取り組むが、佐千夫を批判し独自の道を進む。茂吉の作歌姿勢は伝統的万葉調形式を徹底して守り抜くものだった。第1歌集「赤光」には佐千夫の知らない歌を多く入れたが、発行前に佐千夫が急逝するとその挽歌を初めに載せている。佐千夫への感謝も述べている。

当時、森鷗外は自宅で歌会「観潮楼会」を主催。アララギ派と明星派を融合させ欧州の文学にも触れるよう試み、当時活躍中の与謝野鉄幹、佐々木信綱、木下杢太郎、北原白秋、上田敏など錚々たる人々が論じ合い交流し文学の質を高めていた。この会で啄木と茂吉は出会うことになるが、直接の交流はない。この時代は、日本の近代文学を代表する多くの文人を輩出する恵まれた環境が整った良き時代だった。

その一方、明治憲法下で富国強兵政策が進められていた。啄木は1910年の大逆事件に強い衝撃を受け、のちに社会主義思想に目覚めていく。茂吉にはそれに関わる言説はない。常に国体に順応し、戦争賛美・国威発揚の歌も詠んでいる。

夭折した啄木は生前「一握の砂」を出すのみだったが、友人たちの尽力により全集などが出版される。茂吉は、戦後も歌壇で活躍し多くの歌集や全集を出している…。

倉橋氏は以上のように、社会的背景や文学の流れ、こぼれ話などを織り交ぜながら、啄木と茂吉の足跡を興味深く話しされました。金川氏の適切な導きによって、よりよく理解できたと思います。

倉橋氏は最後に、歌をつくる人への助言として、『何を』ではなく『どう歌うか』『どう表現するか』が大切。『私なりの表現』をしてほしい。そこから作者の考え思いが伝わる」と言われました。そして、「茂吉が佐千夫を超えていったように、私の教室生も私を乗り越えてほしい」とまとめられました。「もう少し聴きたい」という雰囲気の中、終わりました。

(尾崎けい子)